

## 【研究ノート】

# 古代ローマ皇帝を題材としたオペラ

## —モンテヴェルディからの系譜—<sup>(1)</sup>

萩原 里香

### はじめに

オペラ<sup>(2)</sup> が誕生したのは 1600 年であり、音楽史においてバロック時代の幕開けとされる頃である。この時期のオペラが復活上演されるようになって久しいが、オペラの黎明期にその発展に最も寄与した作曲家がクラウディオ・モンテヴェルディ Claudio Monteverdi (1567-1643) である。本研究は彼の最後のオペラ《ポッペアの戴冠 *L'incoronazione di Poppea*》の題材に着目したものである。

モンテヴェルディが初めてオペラを作曲したのは、1607 年のマントヴァでのことである。1600 年頃からフィレンツェでは音楽を用いた舞台作品が数々創作され、それは周辺の都市へも広がり始めていた。芸術文化に造詣の深かったゴンザーガ家 Gonzaga が治める北イタリアの都市マントヴァは、フィレンツェにも劣らぬ音楽文化を発展させていた<sup>(3)</sup>。この地で宮廷楽長として仕えていたモンテヴェルディは、君主のヴィンチェンツォ 1 世 Vincenzo I Gonzaga (1562-1612, マントヴァ公: 1587-1612) の命によりオペラを作曲することになる。台本を書いたのは宮廷書記のアレッサンドロ・ストリッジョ Alessandro Striggio (c.1573-1630) である。そのとき制作された作品が《オルフェーオ *L'Orfeo*》であり、題材となったのは、オウィディウスの『変身物語』及びウェルギリウスの『農耕詩』から採られたオルフェーオとエウリディーチェの物語である。モンテヴェルディはその翌年にも、公子フランチェスコ Francesco IV Gonzaga (1586-1612, マントヴァ公: 1612) の婚礼のために、オッターヴィオ・リヌッチーニ Ottavio Rinuccini (1562-1621) の台本による、アリアドネの神話に基づく《アリアンナ *L'Arianna*》(音楽消失) を作曲している。

マントヴァを去った後、モンテヴェルディはヴェネーツィアへと移り、没するまでサン・マルコ大聖堂の楽長を務めることになるが、宮廷を持たない、共和国であるこの地では、貴族の私邸での祝い事のために作曲依頼を受けたり、別の街から依頼されたりすることはあったものの、オペラを制作する機会をほとんど持たなかった。そのようななか、1637 年、彼の晩年になってようやく、ヴェネーツィアに公開のオペラ劇場、つまり、チケットを購入すれば身分に関係なくオペラが鑑賞できる劇場が作られ、これまで貴族だけが享受する文化だったオペラが一

般市民にも広がったのである<sup>(4)</sup>。再びオペラを創作する機会を持ったモンテヴェルディは、1639-40年の謝肉祭のために、ジャコモ・バドアーロ Giacomo Badoaro (1602-54)の台本による《ウリッセの帰郷 *Il ritorno d'Ulisse in patria*》を作曲した。これは、ホメーロスの『オデュッセイア』より、主人公オデュッセウス（イタリア語：ウリッセ）がトロイア戦争後、海神の怒りにふれたことによる非情な放浪の後、20年ぶりに帰郷するという原作の後半部分を取り上げたものである。上演された劇場はおそらくサンティ・ジョヴァンニ・エ・パオロ劇場 Teatro di Santi Giovanni e Paolo であった。そして同劇場で、1642-43年の謝肉祭のために上演されたのが、ジョヴァンニ・フランチェスコ・ブゼネッロ Giovanni Francesco Busenello (1598-1659)の台本による《ポッペアの戴冠》である。

現在上演できる形で楽譜が現存しているモンテヴェルディのオペラは、《オルフェーオ》、《ウリッセの帰郷》、《ポッペアの戴冠》の3つである。その他音楽が失われてしまった舞台作品も含めると、オペラと分類できるものは10作品ほどあるが、列挙すると、彼がこのジャンルに携わったところからギリシア神話をその題材としてきたことがタイトルからも分かる<sup>(5)</sup>。この点はなにもモンテヴェルディだけの傾向ではない。というのも、オペラが誕生した当時、歌いながら会話をするという不自然な表現方法を見て、人々が違和感を覚えないはずはなく、そこで、神話に登場する神であればこのような一風変わった方法でコミュニケーションをとることもあり得るのではないかと「こじつけ」、歌って物語を展開していく舞台を正当化していた<sup>(6)</sup>。これは、オペラ界全体において当たり前のことであった。

しかしそのようななか、モンテヴェルディの最後の作品はギリシア神話ではないものから題材を取っており、本研究ノートはその点に注目した。彼の没年に上演された《ポッペアの戴冠》は、第5代古代ローマ皇帝ネロ（イタリア語：ネローネ）とその愛人のポッペア（イタリア語：ポッペア）の物語を扱っている。嫉妬深いネローネの妻オッターヴィア、プライドの高いポッペアの夫オットーネ、不実を糾弾する哲学者のセーネカ、まき込まれる小姓たちなど、自分たちの野望を阻もうとする人たちに死に追いやったり、追放したりする。最後には新王妃としてポッペアが戴冠するという結末である。この作品は、ギリシア神話以外から題材が取られ、実在した人物を扱った最初の世俗オペラである<sup>(7)</sup>。この作品以降、初演地であったヴェネツィアはもちろん、イタリア内外で制作されるオペラの題材はギリシア神話に限られることはなくなっていく。

本研究ノートは、オペラの題材が多様化する発端であると言えるモンテヴェルディの最後のオペラ《ポッペアの戴冠》の上演以降、「古代ローマ史」という歴史的物語を扱ったオペラがどのように各地域で展開したか、初演データから上演状況を調査するものである。18世紀までに制作されたイタリア・オペラ（イタリア語で書かれたオペラを指す）のうち、古代ローマ皇帝を扱った作品がどの程度存在するのか、年代順に作品数を提示し、特徴的な時期の作品を都市別に割り出して考察する。そして、どの皇帝をめぐる物語が、もっとも多くオペラの題材として採用されたのか、単純なオペラ作品数と、対する台本数の調査結果を提示しつつ、古代ロ

ーマ史という題材の在り方を概観する。

## 1. 作品調査にあたって

作品データを調査するにあたり、主としてポローニャ大学によるオペラ台本データベース<sup>(8)</sup>を利用した。調査対象として、古代ローマ皇帝が登場すること（主役ではないものも含む）を大前提とし、その他、以下を抽出条件とした<sup>(9)</sup>。

- A. 初演年： 《ポッペアの戴冠》初演 1643 年～1799 年まで<sup>(10)</sup>
- B. 言語： イタリア語（のみ）のオペラ（上演場所は問わず）
- C. ジャンル： melodramma（メロドラマ）、dramma per musica（音楽劇）、opera seria（オペラ・セリア）、dramma giocoso（ドラママ・ジョコーゾ）など（balletto〔バレー〕や oratorio〔オラトリーオ〕は含まない）
- D. 対象皇帝： ユリウス・カエサルから AD476 年（西ローマ帝国滅亡）までの皇帝<sup>(11)</sup>（該当は 83 人。表 1 参照）

表 1：古代ローマ皇帝（ユリウス・カエサル～西ローマ帝国滅亡まで）

帝国誕生以前	ユリウス・カエサル	アレクサンデル・セウェルス帝 (222-235)	コンスタンティヌス帝 (307-337)
	マルクス・アントニウス	マクシムス・トラクス帝 (235-238)	リキニウス帝 (308-324)
	オクタウィアヌス→アウグストゥス	ゴルディアヌス1世帝 (238)	コンスタンティヌス2世帝 (337-340)
BC31（帝国誕生）	アウグストゥス帝 (BC31-AD14)	ゴルディアヌス2世帝 (238)	コンスタンティヌス1世帝 (337-350)
	ティベリウス帝 (14-37)	プビエヌス帝とバルビヌス帝 (238)	コンスタンティヌス2世帝 (337-361)
	カリグラ帝 (37-41)	ゴルディアヌス3世帝 (238-244)	ユリアヌス帝 (360-363)
	クラウディウス帝 (41-54)	フィリップス・アラブス帝 (244-249)	ヨウィアヌス帝 (363-364)
	ネロ帝 (54-68)	デキウス帝 (249-251)	東部帝国 ウァレンス帝 (364-378)
	ガルバ帝 (68-69)	トレボニアヌス・ガルス帝 (251-253)	西部帝国 ウァレンティアヌス1世帝 (364-375)
	オト帝 (69)	アエミリウス・アエミリアヌス帝 (253)	グラティアヌス帝 (367-383)
	ウァレリウス帝 (69)	ウァレリアヌス帝 (253-260)	テオドシウス1世帝 (379-395)
	ウァレシアヌス帝 (69-79)	ガリエヌス帝 (253-268)	ウァレンティアヌス2世帝 (375-392)
	テイトゥス帝 (79-81)	クラウディウス2世帝 (268-270)	エウゲニウス帝 (392-394)
	ドミティアヌス帝 (81-96)	クィンティルス帝 (270)	東ローマ帝国 アルカディウス帝 (395-408)
	ネルヴァ帝 (96-98)	アウレリアヌス帝 (270-275)	ホルリウス帝 (395-423)
	トラヤヌス帝 (98-117)	タキトゥス帝 (275-276)	テオドシウス2世帝 (408-450)
	ハドリアヌス帝 (117-138)	フロリアヌス帝 (276)	ヨハネス帝 (423-425)
	アントニヌス・ピウス帝 (138-161)	プロブス帝 (276-282)	ウァレンティアヌス3世帝 (425-455)
	マルクス・アウレリウス帝 (161-180)	カルス帝 (282-283)	パロニウス・マクシムス帝 (455)
	ルキウス・ウェルス帝 (161-169)	ヌメリアヌス帝 (283-284)	アウイトゥス帝 (455-456)
	コンモドゥス帝 (180-192)	カリヌス帝 (283-285)	マヨリアヌス帝 (457-461)
	ベルティナクス帝 (193)	ディオクレティアヌス帝 (284-305)	セウエルス帝 (461-465)
	ディディオス・ユリアヌス帝 (193)	マクシミアヌス帝 (286-305, 307-308)	アンテミウス (467-472)
	セプティミウス・セウエルス帝 (193-211)	コンスタンティウス1世 (305-306)	アリプリアヌス帝 (472)
	カラカラ帝 (211-217)	ガラウス帝 (305-311)	グリゲウス帝 (473-474)
	ゲタ帝 (211)	セウエルス2世帝 (306-307)	ユリウス・ネボス帝 (474-475)
	アクリヌス帝 (217-218)	マクセンティウス帝 (306-312)	～476年 （西ローマ帝国滅亡）
	エラガバルス帝 (218-222)	マクシムス・ダイア帝 (310-313)	ロムルス・アウグストゥルス帝 (475-476)

## 2. 年代別作品数

対象上演年代（1643年～1799年）全体の作品数（条件ABC）は7,151作品あり、そのうち古代ローマ皇帝の登場するオペラ（条件ABCD）は333作品であった。これらを10年単位（開始時のみは1643年～1649年の7年間を対象としている）で集計し、皇帝を扱ったオペラ作品数の全作品数に対する割合を示したものが表2である。

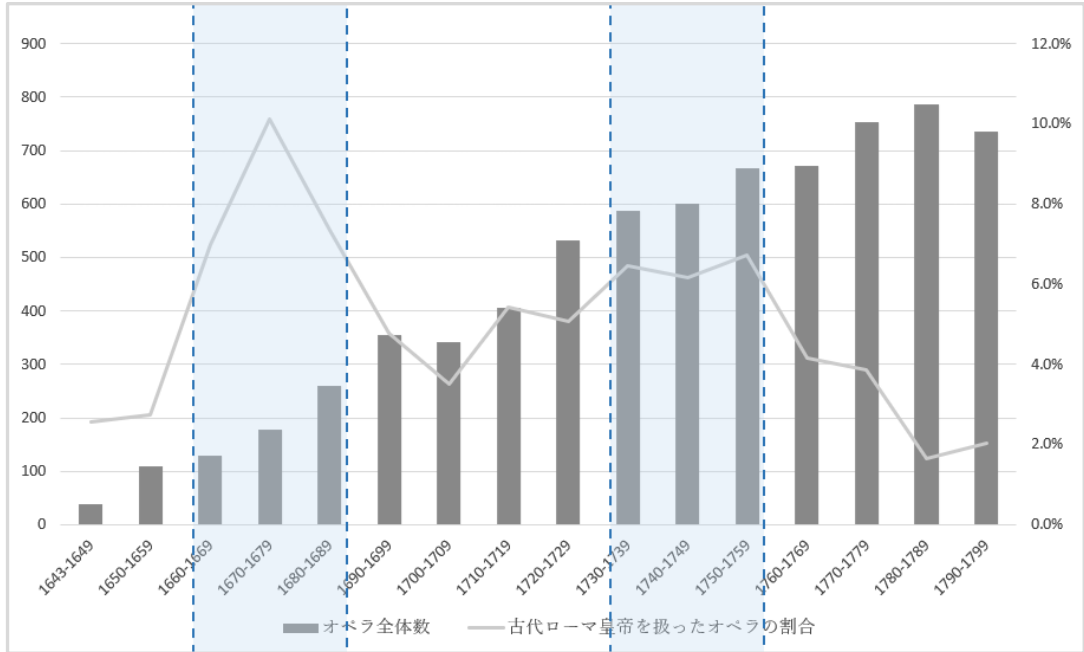
1640年代に皇帝を扱ったオペラは1つであるが、該当はモンテヴェルディの《ポッペアの戴冠》である。この作品の初演後に古代ローマ皇帝を扱ったオペラがすぐに続いたのではなく、1650年代に入ってから書かれるようになったことがわかる。

そして割合に注目すると、1660年代に7%となり、急激に増加していることに気づく。1670年代には10%を超え、1680年代にも7%を超えている。この30年間の後には3～5%となる。その後、1730年より6%を超える状態が続き（1730年～1759年）、その後は再び低迷していく。つまり、18世紀末までの間に、題材としての古代ローマ皇帝の波が2度あったことがわかる（グレーがけの箇所）。その2度の波をわかりやすく示したものが表3である。棒グラフは題材を問わない全オペラの作品数、折れ線グラフは古代ローマ皇帝が登場するオペラ作品数の全体作品数に対する割合である。グラフ内の縦の帯で強調されている通り、折れ線が、表2でグレーがけした2つの年代でちょうど「山」を形成しているのがわかる。この2つの「山」の年代に該当する作品について上演地別に数を整理すると、表4と表5のようになる（いずれもグレーがけの地名はイタリアの都市を意味する）。表4に提示した1660年～1689年に初演された作品は全部で46作あり、そのうち43作品（93%以上）がイタリアで上演されており、その他の地域で上演されたものは3作品（6%程度）にすぎないという結果であった。また該当したイタリ

表2：年代別各作品数と割合

年代	全オペラ数	皇帝オペラ数	割合
1643-1649	39	1	2.6%
1650-1659	109	3	2.8%
1660-1669	129	9	<b>7.0%</b>
1670-1679	178	18	<b>10.1%</b>
1680-1689	259	19	<b>7.3%</b>
1690-1699	356	17	4.8%
1700-1709	341	12	3.5%
1710-1719	406	22	5.4%
1720-1729	531	27	5.1%
1730-1739	588	38	<b>6.5%</b>
1740-1749	600	37	<b>6.2%</b>
1750-1759	668	45	<b>6.7%</b>
1760-1769	671	28	4.2%
1770-1779	753	29	3.9%
1780-1789	787	13	1.7%
1790-1799	736	15	2.0%
合計	<b>7,151</b>	<b>333</b>	

表3：年代別、オペラ全体数及びそれに対する古代ローマ皇帝を扱った作品の割合



アの都市のうち、28 作品、すなわち 60%以上を上演したのがヴェネツィアである。《ポッペアの戴冠》の初演地であるヴェネツィアでは、継続的に取り上げられていた題材であったと言える。一方、表5で提示しているように1730年～1759年に初演された作品は全部で120作品あり、そのうち83作品(70%弱)はイタリアで上演されているが、その他の地域で上演されたものが37作品(30%程度)あることがわかった。1660年～1689年と比較すると、イタリア以外でも古代ローマ皇帝の物語がオペラの題材として取り上げられる機会が増えていることがわかる。なかでもウィーン(オースト

表4：都市別上演数(1660～1689)

都市	オペラ数
ヴェネツィア	28
ボローニャ	2
フェッラーラ	2
ナーポリ	2
ウィーン	2
他	9
他	1
	46

イタリア： 43 (93%以上)

イタリア外： 3 (6%程度)

リア大公国)で上演されたものが8作品あり、当時のオペラ文化の中心地であったヴェネツィア、ナーポリに続く多さである。ウィーンのほか、ミュンヘン(バイエルン選帝侯国)、そしてベルリン(プロイセン王国)が上位であり、いずれも宮廷国家(都市)であり、神聖ローマ皇帝や領邦君主たちの意向であったことを想像させる。ドイツ諸都市がこの時期に古代ローマ皇帝を扱った作品を積極的に上演したことが、ふたつめの「山」を形成する要因であろう<sup>(12)</sup>。その他、古代ローマ史との結びつきがあまり見えないロンドンでも4本が確認できた点は興味深い。とはいえ、これらは「初演のみ」を対象に割り出した数字であるため、再演も含めて検

討する余地がある。

### 3. 皇帝別作品数

次にどの皇帝の物語が最も多くオペラ作品として取り上げられたのか調査した。その結果が表6である。イタリア語のオペラを対象としているため、皇帝名はイタリア語で表記した。その左にわかりやすいようにラテン語での読みを表記している。結果、10 作品以上のオペラに登場する皇帝は（カエサルも含めると）9 人いることがわかった（グレーがけの箇所）。

まず 62 作品が確認できたハドリアヌス帝（Adriano）が最も多いという結果になった。該当するオペラの台本を調査したところ、ハドリアヌス帝を初めて取り上げたのはニコロ・ミナート Nicolò Minato (c.1628-98) の作品《モンテ・カージオのアドリアーノ *Adriano sul Monte Casio*》、二つ目がピエトロ・メタスタージオ Pietro Metastasio (1698-1782) の作品《シリアのアドリアーノ *Adriano in Siria*》であった。そしてこのメタスタージオのひとつの台本を底本にしたオペラ作品が 61 作あることが確認できた。数例を挙げると、1732 年にウィーンで上演された、アントーニオ・カルダ

ーラ Antonio Caldara (1670-1736) 作曲の作品、1734 年にナポリで上演された、ジョヴァンニ・バッティスタ・ペルゴレージ Giovanni Battista Pergolesi (1710-36) の作品、1765 年にヴェネーツィアで上演されたヨーハン・クリスチャン・バッハ Johann Christian Bach (1735-82) の作品、1782 年にリヴォルノで上演されたルイーダ・ケルビーニ Luigi Cherubini (1760-1842) の作品などがある<sup>(13)</sup>。

同様に精査していったところ、ヴァレンティニアヌス 3 世帝 (Valentiniano III) が登場する 52 作品中、47 作品がやはりメタスタージオの台本を基にしたものであった。《エツィオ *Ezio*》として知られるこの台本は、ニコラ・ポルポラ Nicola Porpora (1686-1768) が作曲したものが最初であり、1728 年、ヴェネーツィアで上演された。主人公は皇帝ではなく腹心のアエティウスであり、そのイタリア語名がタイトルになっている。ポルポラその他、1730 年にナポリでヨーハン・アードルフ・ハッセ Johann Adolf Hasse (1699-1783)、1732 年にロンドンでゲオルグ・フ

表 5：都市別上演数（1730～1759）

都 市	オペラ数
ヴェネーツィア	14
ナポリ	11
ウィーン	8
ミラーノ	7
フィレンツェ	6
ミュンヘン	6
ローマ	6
トリノ	5
ベルリン	4
ボローニャ	4
ジェーノヴァ	4
ロンドン	4
リスボン	3
リヴォルノ	3
シュトゥットガルト	3
ハンブルク	2
マントヴァ	2
モーデナ	2
レッジョ	2
シエーナ	2
他	15
他	7
	120

イタリア： 83 (70%弱)  
 イタリア外： 37 (30%程度)

リードリッヒ・ヘンデル Georg Friedrich Händel (1685-1759)、1741年にポローニャでニココロ・ヨンメッリ Niccolò Jommelli (1714-74)らが作曲している<sup>(14)</sup>。メタスタージオのもの以外には3本の台本が確認できた。

ティトゥス帝 (Tito) が登場する43作品中、33本が同じくメタスタージオの台本を使用したものであった。《皇帝ティートの慈悲 *La clemenza di Tito*》として知られるこの台本は、例えば、1734年にウィーンでカルダーラ、1735年にヴェネーツィアでレオナルド・レーオ Leonardo Leo (1694-1744)、1753年にシュトゥットガルトでヨンメッリ、1759年にトリノーでバルダッサレ・ガルッピ Baldassare Galuppi (1706-85)などが作曲している。

ルキウス・ウェルス帝 (Lucio Vero) が登場するオペラは、32作品中28作品がやはり同じ作家のひとつの台本を底本としている。その台本の作者はアポストロ・ゼーノ Apostolo Zeno (1668-1750)である。数例を挙げるならば、1699年にヴェネーツィアで上演されたカルロ・フランチェスコ・ポッラローロ Carlo Francesco Pollarolo (1653-1722)作曲の《ルーチョ・ヴェーロ *Lucio Vero*》、1744年にトリノーで上演されたレーオ作曲の《ヴォロジェーゾ、

表6：皇帝別作品数

皇帝名		オペラ数
Adriano	ハドリアヌス	62
Valentiniano III	ヴァレンティニアヌス3世	52
Tito	ティトゥス	43
Lucio Vero	ルキウス・ウェルス	32
Nerone	ネロ	32
Ottaviano Augusto	アウグストゥス	15
Alessandro Severo	アレクサンデル・セウエルス	15
Tiberio	ティベリウス	10
Giulio Cesare	ユリウス・カエサル	10
Vespasiano	ウェスパシアヌス	7
Aureliano	アウレリアヌス	6
Costantino I	コンスタンティウス1世	6
Massimo Puppieno	ペトロニウス・マクシムス	4
Onorio	ホノリウス	4
Caligola	カリグラ	4
Bassiano	バッシアヌス (カラカラ)	3
Claudio	クラウディウス	3
Eliogabalo	エラガバルス	3
Comodo	コンモドゥス	2
Flavio Valente	ヴァレンス	2
Licinio	リキニウス	2
Massimiano	マクシミアヌス	2
Teodosio II	テオドシウス2世	2
Teodosio	テオドシウス	2
Antemio	アンテミウス	1
Antonino	アントニヌス	1
Diocleziano	ディオクレティアヌス	1
Domiziano	ドミティアヌス	1
Galieno	ガリエヌス	1
Gordiano	ゴルディアヌス	1
Libio Severo	セウエルス	1
Marco Aurelio	マルクス・アウレリウス	1
Ottone	オト	1
Traiano	トラヤヌス	1
		333

パルティの王 *Vologeso, re de' Parti*》、1754年にミラーノで上演されたヨンメツリ作曲の《ルーチョ・ヴェーロ》などがある。

アレクサンデル・セウエルス帝 (Alessandro Severo) が登場するオペラは、15作品中14本が同じ作家の台本を基にしたものであった。これもゼーノのもので、多くが《アレッサンドロ・セヴェーロ *Alessandro Severo*》という題がつけられている。例えば、1732年にピアチェンツァでジェミニアーノ・ジャコメツリ Geminiano Giacomelli (1692-1740) 作曲のものが上演され、1762年にはヴェネツィアでアントーニオ・サッキーニ Antonio Sacchini (1730-86) 作曲のものが上演されている。

ティベリウス帝 (Tiberio) の登場作品も10作品中7作品が同じ作家の台本で、ミナートのものである。例えば、1667年にヴェネツィアで上演された、アントーニオ・サルトーリオ Antonio Sartorio (c.1620-c.81) の《エリオ・セイアーノの幸運 *La prosperità di Elio Seiano*》、そして1671年にウィーンで上演された、アントーニオ・ドラージェ Antonio Draghi (1635-1700) とオートスリア大公レオポルト1世 Leopoldo I d'Austria (1640-1705) による合作オペラがある。しかしながら、表6の上位9人のうち、ネロ帝 (Nerone) とアウグストゥス帝 (Ottaviano Augusto)、そしてユリウス・カエサル (Giulio Cesare) については、ひとつの台本が多数のオペラを生み出したという、上述の例とは異なった。

#### 4. ネロ帝を扱った作品

ネロ帝が登場するオペラ (もちろん《ポッペアの戴冠》を含む) について、台本作家、作曲家、タイトル、初演年そして都市と劇場を一覧にしたものが表7である。対象とした18世紀末までで32作品が確認できた。さまざまな台本作者が列挙されており、メタスタージオやゼーノの台本のように、ひとつの台本が数多く作曲されたわけではないことがわかる。最も多く作曲されたフランチェスコ・シルヴァーニ Francesco Silvani (c.1660-1728~47の間) の台本でも6作品、次にマッテオ・ノーリス Matteo Noris (c.1640-1714) の台本が4作品 (括弧付きのものも含む) という程度である。したがって、台本は (不明著者のものを1として数えれば) 24人の作者によるものが確認できる。

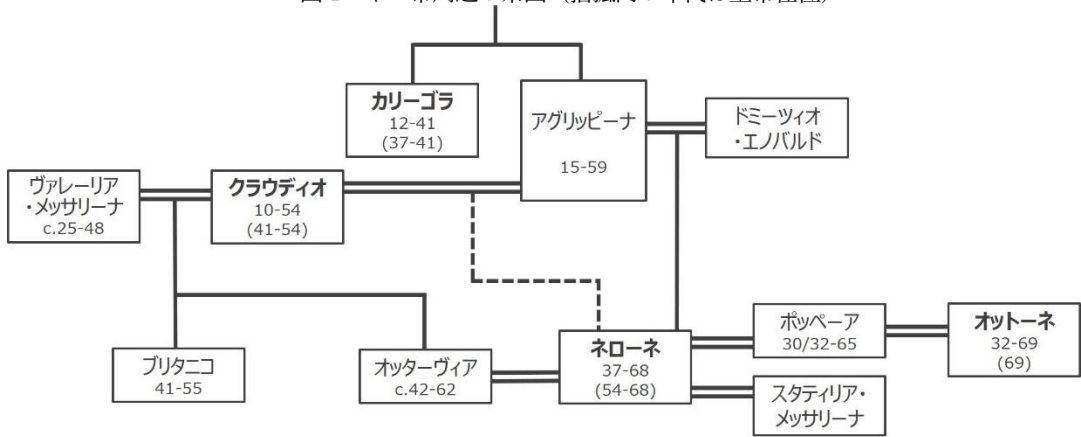
台本数が豊富にあるため、主役 (タイトルロール) がネロ帝であるものが圧倒的に多いものの、それ以外の作品も含めて、傾向をまとめておきたい。それにあたって、ネロ帝周辺人物を図1のように整理した<sup>(15)</sup>。括弧で年代が示されている人物が古代ローマ皇帝であり、その在位を意味している。点線は養父子関係にあることを示す。



表7：ネロ帝の登場するオペラ作品一覧

台本作家	作曲家	タイトル	上演時期	上演都市, 劇場
Busenello, Giovanni Francesco	Monteverdi, Claudio	<i>L'incoronazione di Poppea</i>	1643 謝肉祭	Venezia, Teatro SS. Giovanni e Paolo
Marchesini, Carlo Antonio	Spinazzari, Alessandro	<i>L'Agripina minore</i>	1673/10/15	Verona
Corradi, Giulio Cesare	Pallavicino, Carlo	<i>Il Nerone</i>	1678/12/31	Venezia, Nuovo Teatro Grimano di S. Gio. Grisostomo
?	Boccaccio, Camillo	<i>Il Nerone</i>	1679	Bologna?
?	Leva, Fernando	<i>Il Nerone, o sian Le smanie amoroze di barbaro dominante</i>	1680	Alessandria?
Contri, Giuseppe	Bassani, Giovanni Battista	<i>Agrippina in Baia</i>	1687	Ferrara, Teatro Bonacossi
Neri, Gianbattista	Giannettini, Antonio	<i>L'ingresso alla gioventù di Claudio Nerone</i>	1692/11/9	Modena, Teatro Fontanelli
Noris, Matteo	Perti, Giacomo Antonio	<i>Nerone fatto Cesare</i>	1692/12/27	Venezia, Teatro San Salvatore
Noris, Matteo	Scarlatti, Alessandro	<i>Nerone fatto Cesare</i>	1695/11/6	Napoli, Teatro di Palazzo Reale
Noris, Matteo	Pollarolo, Carlo Francesco	<i>Il ripudio d'Ottavia</i>	1699/2/13 o 1702?	Palermo, Teatro di Santa Cecilia
Silvani, Francesco	Aldrovandini, Giuseppe/ Vincenzo, Antonio	<i>La fortezza al cemento</i>	1699/2/14	Venezia, Teatro Vendramino di S. Salvatore
?	?	<i>Nerone dichiarato Cesare</i>	1702 謝肉祭	Lucca, Teatro di Lucca
Piantanida, Antonio	Magni, Paolo	<i>Agrippina</i>	1703	Milano, Regio Teatro
Convò, Giulio	Scarlatti, Domenico	<i>L'Ottavia restituita al trono</i>	1703/11	Napoli, Teatro di Palazzo Reale
Silvani, Francesco	Albinoni, Tomaso Giovanni	<i>La fortezza al cemento</i>	1707	Piacenza, piccolo Ducale Teatro
Porpora, Nicola	Giuvo, Nicola	<i>L'Agrippina</i>	1708/11/4	Napoli, Palazzo Reale
Grimani, Vincenzo	Händel, Georg Friedrich	<i>Agrippina</i>	1709/12/26	Venezia, Teatro Grimani di S. Gio. Grisostomo
?	Caroselli, Carlo	<i>Nerone e Ombra di Agrippina</i>	1714	Montefiascone?
[Noris, Matteo]	Vivaldi, Antonio	<i>Nerone fatto Cesare</i>	1715/2/19	Venezia, Teatro Sant'Angelo
[Piovene, Agostino]	Orlandini, Giuseppe Maria	<i>Nerone</i>	1721/2/11	Venezia, Teatro Grimani di S. Gio. Grisostomo
Silvani, Francesco	Mancini, Francesco	<i>La fortezza al cemento</i>	1721/2/16	Napoli, Teatro San Bartolomeo
Piovene, Agostino	Vignati, Giuseppe	<i>Nerone</i>	1724/12/26	Milano, Regio Ducal Teatro
Miti, Pompilio	[Pescetti, Giovanni Battista]	<i>Nerone detronato dal trionfo di Sergio Galba</i>	1725 謝肉祭	Venezia, Teatro San Salvatore
Silvani, Francesco	Vivaldi, Antonio	<i>La tirannia gastigata</i>	1726/2/20	Praha, Teatro Sporck
Silvani, Francesco	Bencini, Giuseppe	<i>Il Nerone</i>	1726/12/27?	Firenze, Teatro della Pergola
Fiore, Antonio Domenico di	?	<i>Il trionfo di Galba, o sia Il Nerone detronato</i>	1732	Livorno, Teatro San Sebastiano
Silvani, Francesco	Duni, Egidio Romualdo	<i>Nerone</i>	1735/5/21	Roma, Teatro Tordinona
Villati, Leopoldo de	Graun, Carl Heinrich	<i>Britannico</i>	1751/12/17	Berlin, Regio Teatro
De Paula, Clemens Franz	?	<i>Il britannico</i>	1756 (上演されず)	München, Giov. Giac. Vötter
Galletti, Giovanni Andrea	Schweizer, Antonio	<i>L'innocenza oppressa od Il ripudio d'Ottavia</i>	1764	Hildburghausen, Ducal Teatro
Bottarelli, Giovan Gualberto	Bach, Johann Christian	<i>Carattaco</i>	1767/2/14	London, King's Theatre in the Haymarket
Salfi, Franco	Tarchi, Angelo	<i>La congiura pisoniana</i>	1797/1/18	Milano, Teatro alla Scala

図1：ネロ帝周辺の系図（括弧内の年代は皇帝在位）



ネロ帝自身がタイトルロールになっているか、そうでなくても主役である作品は 20 作品ある。該当作品にはよく知られる作家たちも多数見られる。例えば、1678 年にヴェネーツィアで、ジュリオ・チェザレ・コッラーディ Giulio Cesare Corradi (c.1645-1702) 台本、カルロ・パッラヴィチーノ Carlo Pallavicino (c.1638-88) 作曲の《ネローネ *Il Nerone*》が上演され、1695 年にナポリで、ノーリス台本、アレッサンドロ・スカラルラッティ Alessandro Scarlatti (1660-1725) 作曲の《皇帝になったネローネ *Nerone fatto Cesare*》が、そして 1715 年にヴェネーツィアでおそらく同じノーリスの台本、アントーニオ・ヴィヴァルディ Antonio Vivaldi (1678-1741) 作曲の同名の作品などがある。

母親のアグrippina がタイトルロールになっているものはその次に多く、5 作品ある。よく知られているのはヴィンチェンツォ・グリマーニ Vincenzo Grimani (1655-1710) 台本、ヘンデル作曲で、1709 年にヴェネーツィアで上演された《アグrippina *Agrippina*》であろう。次に妻のオッターヴィアものが 3 作品あり、1699 年もしくは 1702 年にパレルモで上演された、ノーリス台本、ポッラローロ作曲の《オッターヴィアの追放 *Il ripudio d'Otavia*》などがある。また、皇帝ネロの義理の弟であるブリタニコがタイトルになった作品が 2 作品ある。そのひとつが 1751 年にベルリンで上演されたレオポルド・デ・ヴィッラーティ Leopoldo de Villati (1701-52) 台本、カール・ハインリヒ・グラウン Carl Heinrich Graun (1704-59) 作曲の《ブリタニコ *Britannico*》であり、これはジャン・ラシーヌ Jean Racine (1639-99) のフランス語劇『ブリタニクス *Britannicus*』（1669）が元になっている<sup>(16)</sup>。

このうち、一度だけ焦点が当てられているのがポッペアと、カラッタコという人物である。ポッペアが主役のもはもちろんモンテヴェルディの《ポッペアの戴冠》である。そしてカラッタコという人物であるが、図1にはない。1767 年にロンドンで上演された、ジョヴァン・グアルベルト・ボッタレッリ Giovan Gualberto Bottarelli (1770 年代没) 台本、J.C. バッハ作曲の《カラッタコ *Carattaco*》は、古代ローマとの戦いに敗れ、捕虜となりながらも祖国を守った

ブリタニア王の物語であり、愛国心にあふれる内容がイギリス色を表現している作品である<sup>(17)</sup>。

以上、ネロ帝が登場するオペラについて辿ってきたが、イタリア外で上演された作品のタイトルロールがネロ帝以外、周辺人物のなかでも珍しい人物を取り上げたものであるように思われる。ブリタニコやカラッタコなど、その焦点の当て方を掘り下げていくことも本題材研究としての課題であろう。

また、アウグストゥス帝が登場するオペラは 15 作品で、11 本の台本が確認できた。これもひとつの台本がオペラを量産したケースとは異なる。例えば、上述の《ブリタニコ》と同じ台本作者と作曲家による《チンナ *Cinna*》(1748 年、ベルリン)があるが、皇帝に陰謀を企てる側の息子がタイトルになっている作品である。

最後にユリウス・カエサルの登場する作品について、抽出条件次第ではより多くの作品が該当すると思われる人物であるが、オペラ 10 作品に対し 7 本の台本が確認できた。ジャコモ・フランチェスコ・ブッサーニ Giacomo Francesco Bussani (c.1640-80 以後) の台本をもとに《エジプトのジュリオ・チェーザレ *Giulio Cesare in Egitto*》には 3 人が作曲しているが、このうちヘンデルの作品 (1724 年、ロンドン) が今日最も知られているだろう。

改めて、表 6 の上位 9 人の皇帝の登場するオペラについて、オペラ数に加え、台本数も示したものが表 8 である。今回の調査条件に沿った結果として、ハドリアヌス帝やウァレンティニアヌス 3 世帝は、オペラ作品の多さは抜きんできているが、(ゼロから書かれた) 台本数という観点では、24 本が確認できたネロ帝が抜きんできている。作曲家の興味を最もそそいだのは、ハドリアヌス帝であったという結果になるが、これに関してはメタスタジオの台本そ

表 8：作品数上位 9 人の台本数

皇帝名	オペラ数	台本数
ハドリアヌス	62	2
ウァレンティニアヌス 3 世	52	4
ティトゥス	43	9
ルキウス・ウェルス	32	5
ネロ	32	24
アウグストゥス	15	11
アレクサンデル・セウエルス	15	2
ティベリウス	10	4
ユリウス・カエサル	10	7

ものの魅力を見逃すことはできない。そのように考えると、古代ローマ皇帝という題材において、舞台作品の作り手たちから最も興味の対象となっていたのは、《ポッペアの戴冠》の台本を書いたブゼネッロが選んだネロ帝であったと言えるだろう。

おわりに

オペラの黎明期を支えたクラウディオ・モンテヴェルディからの系譜として、彼の最後のオペラであり、初めて実在の人物を取り上げた世俗オペラである《ポッペアの戴冠》をきっか

けにオペラの題材となった、古代ローマ皇帝が登場するオペラをたどってきた。該当するオペラ作品を年代別、皇帝別に数値化することで、古代ローマ皇帝をめぐる物語がヨーロッパ各国でひとつのオペラ題材として定着したことを可視化することができた。また、台本執筆の段階から最も多く題材として取り上げられた皇帝がネロ帝であり、且つこの皇帝が1643年に初めてギリシア神話ではないものがオペラの物語となった際に取り上げられた皇帝だという興味深い結果が現れたことはひとつの成果であった。

本研究ノートでは、年代を18世紀まで、対象をイタリア・オペラに限定し、一定の基準で抽出した作品データから見えてきたものを提示したが、より範囲を広げ、よりさまざまな基準で整理する必要があるだろう。また本調査結果の要因となる社会的・文化的背景についての研究を進めることも欠かせない。今後より多くの視点からさらなる考察を試みるべく、本研究ノートをオペラ題材研究のきっかけの一歩としたい。

#### 〈注〉

- 1) 本研究ノートは、2017年12月9日に早稲田大学にて開催された、〈モンテヴェルディ生誕450年記念シンポジウム〉「モンテヴェルディのオペラから広がるバロック・オペラの世界」(早稲田大学オペラ/音楽劇研究所主催)内での個人研究発表内容に基づく。
- 2) 現在「オペラ」と呼ばれているジャンルは、その黎明期には、*la favola in musica* (音楽寓話劇) や *dramma per musica* (音楽劇) などの名称が付けられており、「opera オペラ」という文言で表現されていなかった。本研究ノートで調査対象とした17世紀半ばから18世紀末までの作品は、その当代でのジャンル名称がさまざまであるため、音楽を用いて物語が展開する形態の舞台芸術(1.で後述する抽出対象C)を「オペラ」と総称する。
- 3) マントヴァは、フランチェスコ2世 Francesco II Gonzaga (1466-1519, マントヴァ侯:1484-1519)に嫁いだイザベッラ・デステ Isabella d'Este (1474-1539)が多くの芸術家を庇護して以来、北イタリアでも有数の芸術都市となっていた。
- 4) ヴェネーツィアで初めての公開オペラ劇場とされるのは、サン・カッシアーノ地区に建てられたサン・カッシアーノ劇場 Teatro San Cassiano である(この地区には16世紀後期に2つの劇場があり、その区別のために所有者の名前をとってトロン劇場 Teatro Tron、もしくは新しい方という意味合いで Teatro Nuovo と呼ぶ)。その他、ヴェネーツィアの当時のオペラ劇場の開場や位置に関する詳細は、今谷・萩原 2018 に詳述されている。
- 5) 《オルフェーオ》(ストリッジョ台本、音楽寓話劇) 1607/2/24、マントヴァ; 《アリアンナ》(リヌッチーニ台本、音楽悲劇) 1608/5/28、マントヴァ; 《テーティデの結婚 *Le nozze di Tetide*》(アニェッリ台本、海の寓話)、未完; 《アンドローメダ *Andromeda*》(マリリアーニ台本、音楽寓話劇) 1620/3/1-3、マントヴァ; 《偽りの狂女リコーリ *La finta pazza Licori*》(ストロツィ台本、音楽劇) 上演されず; 《メルクーリオとマルテ *Mercurio e Marte*》(アキッリーニ台本、オペラ・トルネーオ) 1628/12/21、バルマ; 《略奪されたプロゼールピナ *Proserpina rapita*》(ストロツィ台本、音楽劇) 1630/4/16、ヴェネーツィア; 《ウリッセの帰郷》(バドアーロ台本、音楽劇) 1639-40、ヴェネーツィア; 《エネアとラヴィーニアの結婚 *Le nozze d'Enea in Lavinia*》(台本作家不明、音楽劇) 1640-41、ヴェネーツィア; 《ポッペアの戴冠》(ブゼネッロ台本、音楽劇) 1642-43、ヴェネーツィア。
- 6) 萩原里香 2015 など。
- 7) 実在した人物を扱ったオペラとして、宗教的な物語を題材とした作品は以前より存在する。1631-32年にローマのバルベリーニ家 Palazzo Barberini ai Giubbonari 内で上演された、ジューリオ・ロスピリオージ Giulio Rospigliosi (1600-69) 台本、ステーファノ・ランディ Stefano Landi (1586/87-1639) 作曲の《聖

アレッシオ *Il Sant'Alessio*》である。

8) Corago: Repertorio e archivio di libretti del melodramma italiano dal 1600 al 1900 (<http://corago.unibo.it/>)

9) A から D の抽出条件は、シンポジウム（注1 参照）の全体テーマとその対象に合わせ限定せざるを得なかった。

10) 当時、独自の暦を採用していた都市での上演年は現在の暦に統一して集計している。例えばヴェネツィアで初演された《ポッペアの戴冠》は、ヴェネツィア暦（3月1日より新年）の1642-43年の謝肉祭の時期（12/26～）に上演されており、当時の印刷物には「1642」と表記されているが、本研究の集計においては、1643年の上演として扱っている。

11) ひとつの作品に2人以上の皇帝が登場する場合、つまり物語上では皇帝でなくとも後に戴冠する人物も同時に登場する場合、主となる役の方の皇帝作品として割り当てている。したがって、オペラ1作品につき該当する皇帝は1人である。例えば、《ポッペアの戴冠》では皇帝ネローネの他、彼の2代のうちの皇帝であるオットーネも登場するが、ネローネを扱った作品としてこれを集計している。

12) 大河内によれば、イタリア・オペラの全作品における割合のみならず、1730～50年代（17～19世紀の間が対象）は、ドイツ諸都市においても古代ローマ皇帝を扱ったオペラの上演数が多い時期であった（＜モンテヴェルディ生誕450年記念シンポジウム＞大河内文恵氏の発表「18世紀半ばのドイツ諸都市における古代ローマ史劇によるオペラの状況～C.H.グラウン《ブリタニコ》を例に～」より）。

13) メタマスタージオの台本を使用しているとはいえ、作曲の都度多かれ少なかれ台本は改作されている。例として、名前をあげた4つの作品における全体行数（1幕の行数、2幕の行数、3幕の行数）と各登場人物のアリア数を提示しておく。

	Adriano	Osroa	Emirena	Sabina	Farnaspe	Aquilio	Barsene	Coro
カルダーラ (1732年) 1,561行 (574, 490, 497)	5	3	6	5	5	3		2
ペルゴレージ (1734年) 1,105行 (443, 344, 318)	3	4	4	5	3	3		2
J.C.バツハ (1765年) 662行 (261, 233, 168)	3	4	6	3	6	1	2	1
ケルビーニ (1782年) 828行 (345, 342, 141)	2	3	4	2	4	1		0

詩行数の違いはもちろんのこと、登場人物が追加されているケースもあることがわかる。本研究ノートで以降に言及される複数回作曲されている台本も多少の改定が行なわれており、なかにはタイトルが異なるものもあることを補足しておく。

14) ヨンメツリは《エツィオ》に4度作曲している。1741年にポローニャ、1748年にナーポリ、1758年にシュトゥットガルト、1771年（上演は翌年にリスボンで行なわれた）である。作品分類上これらは「再演」ではなくそれぞれが新作扱いされており、本研究でも4作品とも「初演」として集計している。これに関して、台本や音楽について諸観点から比較した先行研究（Gruppo di lavoro 1983: 249）より、登場人物のアリア数を示した表を参考に下記を引用する。

	Valentiniano	Massimo	Varo	Ezio	Fulvia	Onoria
ポローニャ(1741)	4	4	3	3	3	3
ナーポリ(1748)	3	4	3	4	5	2
シュトゥットガルト(1758)	2	3	1	3	3	2
? (1771)	3	2	1	3	3	2

15) オペラ作品のタイトルとの整合のため、イタリア語読みで表記する。

16) オッターヴィアに焦点を当てた作品に、レチタティーヴォがドイツ語で、アリアがイタリア語という二言語スタイルで書かれたバルトルト・ファイント Barthold Feind (1687-1721) 台本、ラインハルト・カイザー Reinhard Keiser (1674-1739) 作曲で、1705年にハンブルクで上演された《オクタヴィア *Octavia*》もある。ドイツ語のオペラとして分類されるため、本研究の集計外の作品であるが、＜モンテヴェルディ生誕450年記念シンポジウム＞においては、この作品からアリアが1曲、テノールの黒田大介氏によって演奏された。またグラウンの《ブリタニコ》からもアリアが1曲、ソプラノ末吉朋子氏によって演奏された。いずれも伴奏は中谷路子氏。

- 17) <モンテヴェルディ生誕 450 年記念シンポジウム>吉江秀和氏の発表「J.C.バッハの《カラッタコ Carattaco》(1767年ロンドン・キングズ劇場初演)～ロンドンで上演された古代ローマ帝国にまつわるオペラ～」より。

<主要参考文献>

- Glixon, B. L., J. E. Glixon. 2006. *Inventing the Business of Opera, The Impresario and His World in Seventeenth-Century Venice*. New York: Oxford University Press.
- Gruppo di lavoro sotto la guida di Agostino Ziino. 1983. Le quattro versioni dell'Ezio di Nocolò Jommelli, in *Musica e Cultura a Napoli dal XV al XIX secolo*, a cura di Lorenzo Bianconi e Renato Bassa. Firenze: Olschki, 239-265.
- Ivanovich, C. 1688. *Memorie teatrali di Venezia*. Venezia: Nicolo Pezzana (1993, Lucca: LMI).
- Ketterer, R. C. 2009. *Ancient Rome in Early Opera*. Urbana & Chicago: University of Illinois Press.
- Mangini, N. 1974. *I teatri di Venezia*. Milano: Mursia.
- Manuwald, G. 2013. *Nero in Opera : Librettos as Transformations of Ancient Sources*. Berlin: De Gruyter.
- Sartori, C. 1990-. *I libretti italiani a stampa dalle origini al 1800*. Cuneo: Bertola & Locatelli.
- Selfridge-Field, E. 2007. *The Calendar of Venetian Opera: A New Chronology of Venetian Opera and Related Genres, 1660-1760*. California: Stanford University.
- スカー、クリス 1998 『ローマ皇帝歴代誌』青柳正規監修 月村澄枝訳 創元社
- タキトゥス 1981 『年代記 (上) (下) —ティベリウス帝からネロ帝へ—』国原吉之助訳 岩波書店
- 今谷和徳・萩原里香 2018 「17 世紀ヴェネツィアのオペラ劇場の変遷とその位置」 『早稲田大学イタリア研究所 研究紀要』 第7号: 53-75
- 萩原里香 2015 『音楽劇の黎明期におけるコラーゴに関する試論—舞台上演責任者という職の成立をめぐって』 東京藝術大学音楽研究科博士論文

インターネットサイト

Corago: <http://corago.unibo.it>

Libretti d'opera italiani: <http://www.librettidopera.it/>

## Le opere liriche concernenti la storia degli antichi imperatori romani: l'eredità di Monteverdi

Rika HAGIHARA

Questo studio riguarda il soggetto dell'ultima opera lirica di Claudio Monteverdi, *L'incoronazione di Poppea*, rappresentata nel 1643 a Venezia. Monteverdi era un grande compositore che contribuì allo sviluppo delle opere liriche nella storia della musica. L'ultima opera di Monteverdi trattava di storia romana, precisamente del quinto imperatore romano, Nerone e della sua amante, Poppea. Insomma quest'opera trattava per la prima volta di persone reali in un'opera lirica di tema non sacro.

Per questo motivo, ho deciso di analizzare le rappresentazioni delle opere liriche eseguite dal 1643 alla fine del Settecento in Europa e anche quelle delle opere che trattavano la storia antica romana. Prima considero la proporzione tra le prime e le seconde per periodi e per regioni. Si possono rilevare due periodi che mostrano un'alta percentuale di opere con soggetto romano: verso la seconda metà del Seicento (1660-89), quando la maggior parte delle opere liriche che trattavano gli imperatori romani vennero rappresentate in Italia, soprattutto a Venezia; poi verso la metà del Settecento (1730-59), quando vennero rappresentate abbastanza anche all'infuori dell'Italia, soprattutto nei paesi di lingua tedesca. Inoltre compilando una lista dei titoli per ogni imperatore e considerandone la quantità, si scopre che nelle opere liriche l'imperatore che compare di più è Adriano (*Adriano in Siria* composta da Caldara, Pergolesi, J. C. Bach, ecc.), poi verificando il numero dei libretti, si scopre che il più ricorrente è Nerone (*L'incoronazione di Poppea* scritta da Busenello, *Nerone fatto Cesare* da Noris, *Agrippina* da Grimani, ecc.).